

# 幼稚園における牧場体験を取り入れた 食育プログラムの開発と評価

松 山 由美子

幼稚園における食育プログラムの1つとして、牧場体験を核にしたプログラムを開発した。本プログラムは、食育ではあるが、幼稚園教育要領に明記された5領域との関連を考慮して多様な活動における学びが形成されるようになっている。開発したプログラムの実施により、領域「健康」に含まれる、食(牛乳・乳製品)への興味や関心、領域「環境」に含まれる、自然環境(牧場や動物)への興味や関心が高まり、保護者も実感するほどの幼児の変容が見られた。

幼稚園のカリキュラムに、ただ牧場体験を追加しただけではなく、「思いやりの心を育てる」ことを園の目標にしている幼稚園の実情を踏まえて牧場体験とそれに関するプログラム(食育、多様な表現活動、遠隔交流)を改めて意識して保育者が実施することで、先行研究では見られなかった領域「人間関係」に含まれる社会性の発達、領域「表現」及び「言葉」への興味・関心も高まった。領域「環境」も、自然環境だけではなく、「牛乳」を媒介とした買い物場面(社会環境)への興味・関心も高まったことが明らかになった。

キーワード：幼稚園における食育、牧場体験、保育プログラム開発

## 1. 本研究の背景

心身の成長が最も顕著な乳幼児期は、食習慣の基礎を確立する時期でもあり、幼稚園・保育所において食育に取り組むことは重要である。しかし、古郡・山口(2012)によると、保育者がもつ「食育」の視点としては、「給食での指導」と「好き嫌いの改善」、「野菜の栽培」、「子どもの調理」などにとどまっている<sup>1)</sup>ことが報告されている。また、平成20年度に大阪府食育推進プログラムが実施した「幼稚園・保育所における食育実施状況アンケート」の結果からも、幼稚園での食育は増加したが、その内容は「野菜の働き」68.7%、「食事マナー」67.4%、「偏食」60.7%であった<sup>2)</sup>と報告があり、食育と言えば野菜、マナーなど給食を通じた保育、偏食(好き嫌い)の改善と同様の傾向を示していることが分かる。

厚生労働省が示した『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～』にも書かれている、食育の本来のねらいの1つである「食べる行為が食材の栽培といのちを育む営みとつながっていると感じる」「食べ物を媒体として人と話すことができる環境をできるだけ多く作り、自分の作ったものを味わい、生きる喜びにつなげる」<sup>3)</sup>体験を大事にしつつ、幼稚園で気負いなく取り組める食育プログラムの開発が求められている。

そこで、本研究では、食育に初めて取り組む幼稚園でも取り組みたいと思えるような活動にするために、初めて食育に取り組む幼稚園を実践先に選定した。また、田中(2011)の小学生における牧場体験<sup>4)</sup>の事例から、いのちを育む営みとつながっていると感じやすい牧場体験を取り入れた食育活動のプログラムを開発し、実施、評価することとした。いのちとは言い死に直面する

教育を導入するには困難さも伴う場合もあるが、乳牛であれば「いのちを分けてもらっている」という体験になることや、都会の普段の幼稚園生活では経験できない大自然とのふれあいも経験できることから、取り組みやすいと考えた。

プログラムの開発においては、牧場体験において、乳牛との触れあいや牧場で働く人たちとの交流を通して食といのちの大切さへの思いを育むことを感じることをねらいとする。実際に牧場に行き、乳牛とふれあう体験をとおして、牛乳のもつ栄養がからだの成長・発達に大切であることを学ぶだけではなく、牛乳のできる過程やいのちの大切さについて感じるができることを考える。

次に、この牧場体験をもとに、幼児でも取り組めるような調理活動へと発展させる。牛乳が苦手でもおいしく摂取することができる料理体験として取り入れる。

また、幼稚園での活動を、幼児たちが自分の言葉や絵画、造形、身体表現活動を通して表現する経験を取り入れる。この活動を通して、牧場体験だけではなく、好き嫌いの改善や調理体験活動をただ体験して「楽しかった」で終わらせるのではなく、幼児たちが自ら「話す」「聞く」「書く」「描く」「造る」「動く」という活動を通してより深く牛乳を通して「食」への興味や関心を高めることができる。さらに、偏食の改善につながると思われる、「食への感謝の気持ち」を豊かにすることを大切にしたいと考える。なぜなら、食育の本来のねらいの1つである「食べ物を媒体として人と話すことができる環境をできるだけ多く作り、自分の作ったものを味わい、生きる喜びにつなげる」ことの基礎となるような「食」への興味・関心を高める活動が、幼稚園における食育の取り組みの第一歩だと考えているからである。

## 2. 本研究の目的と方法

本研究の目的は、食育に牧場体験を取り入れることで、幼児たちの多様な感覚をフルに活用し、食や命への興味や関心を高め、食や命の学びを形成するプログラムを開発することである。また、そのプログラムは、食育に初めて取り組む幼稚園にも気負いなく取り組めることを前提としている。そのため、幼稚園教育要領の5領域に基づくねらいと活動内容をふまえて筆者が中心にプログラムを作成し、実施する幼稚園の保育者と協力しながら実施した。なお、プログラムは2013年5月に大枠を作成したが、プログラムの活動ごとに担任保育者たちと見直し、随時、幼児や幼稚園の状況に合わせて改良しながら実施している。

本プログラムは、平成25年度（2013年4月～2014年3月）の1年間を通して、S幼稚園（大阪府和泉市）の年長児86名（うち1名は牛乳アレルギー児。搾りたて牛乳を飲む体験と、牛乳を使って作ったバターを食べる体験以外は同じプログラムを実施した）を対象に実施した。本プログラムでは牧場体験が核になるが、大阪府には中央酪農会議が酪農教育や牧場体験を学習に活用するための牧場である「酪農教育ファーム認証牧場」が存在しないため、S幼稚園から一番近い奈良県の酪農教育ファーム認証牧場である、ラッテたかまつ（奈良県葛城市）で学習することとした。

開発したプログラムの評価は、幼児たちと接している担任保育者（3クラス3名）への聞き取りや質問紙調査によって得られた回答をもとに、保育者と筆者とで協議しながら形式的に行った。さらに、保護者への質問紙調査を行い、より詳細な幼児たちの学びの姿を明らかにし、プログラムの評価の1つとした。

### 3. 本研究の結果

研究の成果について、1) 開発したプログラムのねらいと内容（プログラム実施事前調査（家庭への調査）結果を含む）、2) 開発したプログラムの実施と幼児たちの学びの姿、及び、保育者の評価、3) プログラムに関する保護者の評価、についてまとめた。本論文では、特に、核となる牧場体験とその事前学習について報告する。

#### (1) 開発した食育プログラムの概要と保護者への事前アンケート結果

牧場体験を中心に、幼稚園教育要領における5領域をふまえて幼児の多様な感覚を刺激することで、食や命への興味や関心を高め、「命を大切にし、食を大切に作る心を育てる」ことをねらいとするプログラムを開発することとした。偏食の改善のみを目指すのではなく、牛や牛乳に触れ合うさまざまな体験を通して「食への感謝の気持ち」をもつことができるようにすることである。実際に幼児が学ぶこと、体験することを図でまとめ、それらの体験で達成したいねらいを以下にまとめた (Fig.1)。

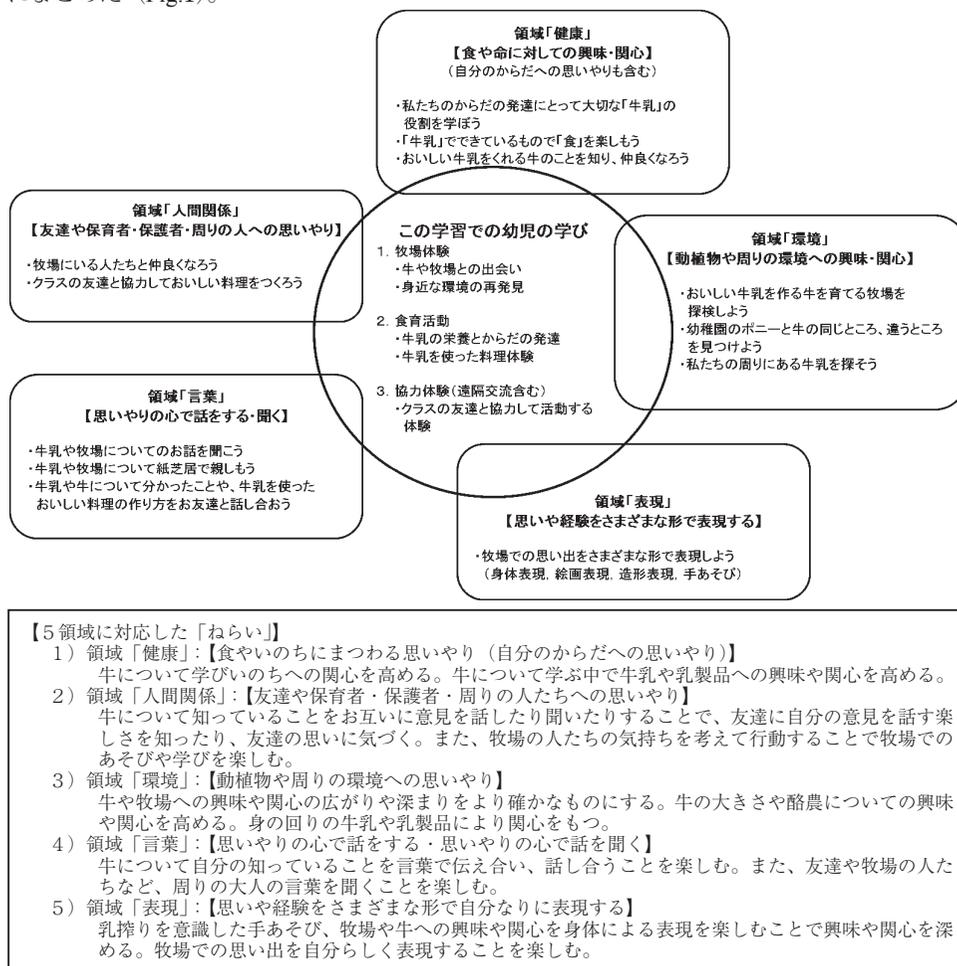


Fig.1 本研究が目指す、牧場体験を取り入れた食育プログラムと5領域に対応したねらい

プログラムの実施対象園となる幼稚園は、普段から領域「表現」と、動物との触れあいを中心にした領域「環境」を重視したカリキュラムで幼稚園教育に取り組んでいる園である。この強みを活かすようなプログラムを考えていくことが、プログラムの実施に対して担任保育者たちが気負いなく取り組めると考えた。幼稚園の目標を再確認しながら、この学習における幼児の学びと5領域の関連を以下のように整理した。

最終的に、この1年のプログラムは以下のとおり実施された。

Table.1 S幼稚園における牧場体験を取り入れた食育プログラムの実際

<p><b>6月：牛に関する事前学習「パネル展」と、牛についての話し合いの時間。</b>          牛に親しみをもつための表現あそび</p> <p><b>7月：紙芝居「牛乳からできる様々な製品」「牧場でのおやくそく」による学習</b>          牧場体験及び調理体験（アイスクリームづくり）          絵日記による牧場体験の学びの振り返り</p> <p>9月：牧場へのお手紙を書く          9月：廃材による牛づくり（幼児からの発案で始めた造形活動）          11月：作った牛を中心にした作品展における牛についての学びの中間まとめ          12月：調理体験（バターづくり）          3月：牧場との遠隔交流による学びの振り返り</p>	<p>※太字は本論文で報告する活動</p>
---	-----------------------

保護者へは、本プログラムを実施するにあたって、承諾を得ることと、幼児の食（牛乳）や牧場体験をはじめとした大型動物への接触状況や、保護者の本プログラムに対する意見等を集約するために事前に質問紙調査を実施した。幼児数86名中82名の保護者から回答を得ることができた。

82名中、33名が牛乳は「毎日飲む」と回答しているものの、16名は牛乳を「飲まない」と回答していること、しかし、一方で乳製品については「好き」「普通」合わせて80名であったことが明らかになった。

また、保護者が意識して牛乳や乳製品を摂取させているかという問いに関しては、2名の保護者以外は「たまに」「よく」意識しているという回答であった。ちなみに、摂取させていないと回答した2名の保護者は、幼児も牛乳は嫌いで飲んでいないと回答した保護者と、幼児の牛乳に関する質問へは無回答である保護者であったこと、また「よく」意識して牛乳や乳製品を摂取させていると回答した保護者の中には、「3歳まで牛乳アレルギーだった」ことや、「動物性脂肪の摂り過ぎが気になる」こと、さらに「日本人の体質と牛乳について以前に勉強したことがありその結果を踏まえて」摂取を控えるよう意識していると回答している保護者も見られた。

先述の大阪府食育推進プログラムが実施した「大阪府における幼児の食生活状況アンケート」によれば、平成20年度の幼児の牛乳・乳製品の摂取状況は、「ほぼ毎日摂取する」が62.2%、「週に4、5日摂取」が16.2%と8割近くに達し、「ほとんど摂取しない」及び「摂取したことがない」を合わせても7.1%である<sup>5)</sup>ことが明らかになっている。大阪府の調査方法が「牛乳・乳製品」合わせての質問項目であるので、S幼稚園の幼児と単純に比較することはできないが、牛乳は飲ま

ない幼児が16名、うち2名は牛乳や乳製品を摂取させていないことから、この「牛乳は嫌い」な幼児たちに対して、また、保護者に対しても牛乳への興味や関心が高くなり、少しでも好きになってもらえるように意識できるようなプログラムを開発することは意味があると思われた。特に、乳製品に対しての「嫌い」がかなり少ないことから、牛乳を用いた調理体験はより牛乳への興味や関心を高めることについて非常に有効ではないかと予想された。

調理体験への参加に関する事前調査では、多くの幼児が買い物への同行と配膳のお手伝いを経験していることが明らかになった。包丁やピーラーで怪我をした体験をもつ幼児もいたため、担任保育者たちとの話し合いの結果、あまり難しい調理はしないことにした。

最後に、動物との触れあい体験に関する事前調査では、S幼稚園で飼っているポニーとの触れ合いは全員がえさやりなどで1度は経験しているが、それ以外に家庭でも近くの水族館や牧場などで経験している幼児がほとんどであった。その経験は概ね楽しいものであったとの回答であったが、「あまり楽しくなかった」「怖かった」と答えている保護者が4名おり、その理由が「動物が大きくて怖かった」「(動物に対して子どもが)小さかった」と回答していることが明らかになった。そのため、牧場へ行く事前学習では、大きさを具体的に示し、できるだけ牛の大きさによる怖さを払拭することをねらいの中心に据えることとした。

## (2) 開発したプログラムの実施と幼児の学びの姿、及び、保育者による評価

本論文では、プログラムの核となる牧場体験の充実を支える事前学習と牧場体験活動(事後活動を一部含む)に焦点を絞って報告する。各活動のねらいと概要、活動時における幼児たちの姿、活動後の保育者の評価を明らかにし、本プログラムの評価の一つとして検討する。

### ①事前学習(6/24～7/16)

#### 1. 「幼児の姿」の検討と事前学習における「ねらい」の設定

本プログラムにおける事前学習のねらいは、牛や牛乳への興味や関心を高めることにつながる牧場体験への興味や関心を高めることである。また、牛や牛乳について知っていることを友達や先生と話し合うことで、牛や牛乳についての興味や関心を高めることである。このねらいを達成するために、幼児の姿を検討した。

幼稚園で飼っているポニーをはじめ、動物に対する愛情を育み、思いやりの心や生き物への興味・関心を育む保育に以前から取り組んでいるS幼稚園では、年間を通して自然に園内で見られる生き物に興味や関心が高まるように指導・援助を行っている。ポニーへの乗馬体験、えさやり体験は年に1度、5月末から6月初旬に行われている。今回の対象となった年長児については、約半数が未就園児クラス(3歳未満児クラス)からの持ち上がりで、3歳になるまでにすでに親子でポニーへの乗馬とえさやりを行っている幼児たちであったと担任保育者の聞き取り調査より明らかになっている。

上記のような毎年の体験の中での幼児たちのようすから、ポニーに対して大きくて怖いあまり近づこうとしない幼児や、ポニーは好きだけどくさいから近づきたくないという幼児もいることを保育者は理解している。7月に実施した保護者への事前アンケートでも、家庭での動物

接触体験について、大きな動物に幼児が恐怖を感じた体験談を記述する保護者が12名いたことから、ただ動物とのふれあいを経験させるだけでは逆効果になってしまう可能性も高いとのことであった。そのため、S幼稚園では、4月には身近な動物（園庭にいる小動物、昆虫など）に幼児たちの興味や関心が高まるよう工夫し、少しずつ動物に親しんでいけるような保育を行っている。

しかし、園長はじめ保育者たちは、2つの問題意識をもっていた。一つは、毎日当たり前のように保育室のすぐ傍の馬小屋にポニーがいることで、ポニーに対してもっとよく見よう、もっと調べようという気持ちにならず、ポニーの乗馬体験が「今年も楽しかったね」という体験だけで終わってしまうことである。もう一つは、「雪が降ったらポニーはどうするの?」というような優しい気持ちはあるものの、日々の中で「雨が降ったらポニーの近くはにおいがすごいね」と口にして、ポニーを敬遠する幼児も少なからず存在することである。この毎年続いてきた二つの問題を解決することが、牧場体験を成功させるためには必須と園長と保育者たちは考えた。

したがって、牧場へ下見に行った保育者が真っ先に感じたこと事後インタビューでも話して下さった「大きいことへの恐怖を払拭し、動物と触れ合うことを楽しむ」ことと、ポニーへの触れ合い体験や日々の保育の中で園長や保育者が感じていた「動物の持つ臭いについても受けとめ、思いやりをもって動物と接することを楽しむ」ことの2点を克服し、牛や牛乳への興味・関心を高めることを、事前学習のねらいとした。

## 2. 事前学習の実際

6月24日から、幼児たちの動物への興味が、それまでの保育活動で取り入れていたダンゴムシやポニーから牛に広がるよう、各クラスに保育者が作った牛のパネルを設置し、幼児たちが自由に閲覧できるようにした。7月に入り、保護者に宿泊保育で牧場へ行くことを周知し、アレルギー確認を行った。

7月2日以降には、各クラスで、牛について知っていることをお互いに話し合う機会をもった（クラスによって実施日が異なり、7月16日の全体での事前学習の後の幼児たちとの話し合いの機会をさらにとったクラスもあった）。

まず「牛乳から作れるもの」としては、バター、アイスクリーム、ヨーグルト、チーズ、乳酸菌飲料（ヤクルト）、スープ、飴（ミルクキャンディ）、が挙げられた。牛の特徴としては「茶色い牛や黒いだけの牛もいる」「牛には手がない」「足が4本」「つのはオスだけ」「牛は服を着なくても毛がはえているのであったかい」「暑くなったら毛を刈る」といったことが挙げられた。他にも「牛は病院に行かなくても赤ちゃんを産むことができる」「牛と牛が闘う闘牛というのがある」「鼻についているわかは何のためについているのか不思議」といった言葉が挙げられた。

他にも、保育者が牧場へ下見に行った時に撮影した写真を見ながら、以下のような回答が挙げられた。「黄色い名札がついている?!」「耳に番号がついている」「草を食べる」「先生50人分の大きさ」「しっぽが細長い」「耳が三角で小さい」「意外と足が細い」「おっぱいが大きい」「からだよりも顔が小さい」「足の爪、かたそうだな」「どんな大きさ? 赤ちゃんは大きいのかな?」などであった。

7月16日には、学年全体で「牛についてもっと知ろう」ということで、保育者の話を幼児全員

で聞いて考える機会をもった。

牛の大きさについては、下見に行ってきた保育者と牛とが並んで写った写真を見せるだけではなく、「先生何人分かな？」と問いかけ、3人の保育者が実際に並んだり動いたりしながら大きさを確認した。また、新聞紙で実際の牛の大きさを表現し、幼児たちに提示した。新聞紙の牛は平面ではあるが乳の部分まで丁寧に再現されており、この新聞紙の牛を用いて乳搾りへの興味や関心を高めることができるように考えられていた。大きさに驚く幼児も見られたが、この新聞紙の牛を年長組の保育室の廊下に貼り、自由に見たり触ったりすることで、幼児たちが大きさに慣れることができるよう配慮した（Fig.2参照）。

その後、保育者からのおいについての話を幼児たちは聞いた。ポニー体験や虫との触れあいのなかで感じたにおいを思い出すことや、人間の体臭のこと、まだおむつがとれていなかった頃の話などをしながら、においについてどう考えるか、どう行動するかを幼児たちが自ら考える時間を十分に確保した。例えば、牛がくさい時に「臭い」と言うことが牛に聞こえたらどういう気持ちになるかといった問いかけなどを通して、幼児たちに思いやりを行動で示すことの大切さを伝えた。

それから、実際に牧場へ行くことへの楽しみを深めるために、保育者がオリジナルで考えた手あそび『牧場の牛さん』を全員で楽しみ、最後にはみんなで牛になってあそぼうという身体による表現あそびを行って全体の事前学習を終えた（Fig.3参照）。



Fig.2 牛の大きさを感じるために保育者た食育が作成した新聞紙の牛



Fig.3 手あそびを楽しむ幼児と保育者

### 3. 事前学習中、事前学習後の幼児の姿

6月末から各保育室に作ったパネルはちらちらと見て楽しむ程度だったが、牛について知っていることを聞いた7月初旬頃から、牛に会うことを知り、とても楽しみにしている姿が見られた。学年全体での「牛についてもっと知ろう」では、牛や牧場への興味や関心を高めようと保育者たちが考えた手あそびがとても好評で、この学習後から牧場体験の日まで、園のあちこちで聞かれるようになった。また、保育室の近くの廊下に掲示していた新聞紙牛の乳のところ、実際にこの手あそびを口ずさみながら乳搾りの練習をしている幼児も多く見られ、牧場に行くまでに、乳

のところだけは搾られた跡で新聞紙にしわがで、よれよれになっているほどであった。

牧場へ行くことを日々楽しみにしているようすがしっかり伝わったと3人の担任保育者が評価した。また、牛について知っていることを尋ねた時も、その場で写真をよく見て答えている姿が見られたことについて、幼児の牛についての知識の有無よりも、牛に興味や関心をもって答えようとしているところに、保育者もこの事前学習のねらいは達成されたと感じると評価していた。

## ② 牧場体験 (7/22 (話し合いは7/23))

### 1. 「幼児の姿」の検討と牧場体験における「ねらい」の設定

本プログラムにおける牧場体験のねらいは、牛や酪農家とのふれあい、また牛乳を使った食育体験を通して、牛乳や乳製品への興味や関心を高めることである。また、牧場体験後には、その感動や思いを表現したり、友達や先生の言葉を聞いたりすることを楽しむことである。このねらいを達成することで、牛や酪農家、乳製品など自分たちの食事に携わっている人たちへの思いやりの心が育つきっかけになってほしいと願っている。

そのため、牧場体験は、少しでも長く幼児の活動時間が取れるように、毎年の行事である幼稚園での宿泊保育の1日目に設定した。降園時間を気にすることなく牧場であそぶことができたため、保育者もよかったと評価している。保護者からも「貴重な体験が宿泊保育に入って楽しみという声が多かった」と園長が事後インタビューで語っていた。

牧場体験は、往復のバス内も含めて活動を設定した。バス内での「紙芝居による学び」「手あそび」そして、牧場での「牧場や牛の観察」「乳搾り体験」「食育（アイスクリームづくり）」である。

バス内での紙芝居は中央酪農会議が作成した紙芝居『牧場でのお約束』『牛乳からできるさまざまな製品』の2つを使用した。しかし、小学生向けの紙芝居のため難しい単語が出てくことや、一方的に紙芝居側から話しかける口調が進められることが幼児には難しいと判断し、保育者が紙芝居を通して幼児たちに話しかけ、問いかけるような形に読み替えて使用した。

例えば『牧場でのお約束』では、「牧場では静かに」というところは「牧場の牛さんたちはうるさい音が苦手です。みんな、これから牧場に行くけどお話ししたくなった時、どうすればいいかな?」というように、保育者が問いかけ、幼児たちが考えたことを発表し、それを保育者が拾い上げて「そうだね、牧場では静かな声でお話しないと牛さんがびっくりしちゃうね」とまとめる、という進め方である。

牧場では、86人の幼児たちが全員スムーズに体験ができるように、牧場散策と乳搾りのチーム、アイスクリームづくりのチームという2チームに分かれて、午前と午後で活動を入れ替えて行えるようにした。最後に、全員で搾りたて牛乳の試飲と作ったアイスクリームを食べることにした。

## 2. 牧場体験の実際と幼児の姿

バス内での紙芝居は、バス内で保育者が立って提示することができず、後ろの方に座っている幼児には見難いということもあったが、主に保育者と幼児とのやりとりを中心に進めていったことがあってよかったと思われる結果となった。幼児たちもただ牧場へ行く注意を受けるだけではなく、自分たちで考えて出した結果が約束ごとになるため、守ろうという意識も高まり、これか

ら牧場で牛や酪農家の方に迷惑をかけずに一緒に楽しもうという気持ちも育むことができたと思われる。さらに、復路での『牛乳からできる製品』についても、酪農家の方の話を思い出しながら問いかけて読むことで、幼児たちの興味や関心がより高まったと思われる。保育者も、保育者自身が問いかけ、幼児の声を拾い上げながら進めることで、紙芝居がなくても幼児たちは理解し、楽しんで考えることができたと思ったと評価していた。

「牧場散策と乳搾り」では、乳搾り体験を担当してくれた牧場「ラッテたかまつ」のおじいさんの説明を中心にポニーやさまざまな牛について観察・触れあい体験を行った後 (Fig.4)、おじいさんから乳搾りの仕方と牛についての説明を聞いた後、一人ずつ乳搾りを行った (Fig.5)。

牛やポニーとの触れあいでは、幼稚園のポニーと比較する声 (園のポニーより小さいね、など) や、牛は優しいと思っていたけど、うるさくしたりして怒らせたら怖いこと (体操担当の男性保育者が少しおどけた時に牛が突き飛ばそうとしたようすを見て)、すごく大きいけど優しい目をしていることを話していた。事前学習で意識した「牛の臭い」については、からかうような「くさいー」という言葉を誰も発することなく、「思っていたほどくさいね」と友達どうして話している姿も見られ、幼児たちなりに牛を傷つけることなくこの牧場体験を楽しもうとしていることが明らかになった。おじいさんから直前の諸注意を受ける場面でも、幼児たちは、おじいさんの言葉一つひとつを丁寧に聞きながらも、「幼稚園で乳搾りの練習をしてきたんだよ」と、とても意欲的な姿を見せていた。

乳搾りは、怖がってなかなか牛の乳の下まで行くことができない幼児もいたが、おじいさんの「大丈夫だよ」という言葉や、友達の「怖くないよ、ベティちゃん (乳搾りをさせてくれた牛) はおとなしくて優しいよ」という言葉に支えられ、全員が乳搾りを泣くことなく体験できた。



Fig.4 牧場の説明を酪農家から聞く



Fig.5 乳搾り体験

乳搾りの時には、「ベティちゃんはとても優しく、一生懸命我慢してくれていたよ」「(座っていた牛をおじいさんが立たせてくれたようすを見て) これから乳搾りをさせてくれるために一生懸命起きてくれた」などと幼児たちは小さな声で語っていた。自分の番が終わってからも、幼児たちは保育者に注意されることもなく静かにその場で待機することができた。また、友達を応援する時も、大きな声を出さないようお互いに「静かに！」と声をかけあいながら楽しんでいた。

アイスクリームづくりでは、8人1組になり、卵を割ったり、かきまぜたりする作業を分担し

で楽しんだ。牧場の方の指示どおり取り組み、魔法の言葉「おいしくなーれ」を連呼しお互いを励ましあいながら、アイスクリームづくりを行った (Fig.6, Fig.7)。魔法の言葉の掛け声が大きくなりすぎて保育者から注意を受けたぐらいで、幼児たちどうしの揉め事はなく、順番や時間を守って体験を楽しめた。かきまぜるだけの単調な作業であるが、誰一人、しんどい、疲れたと言わず、疲れたら交代してもいいところを「20数えるまで (グループによって数は異なった) がんばる」とかきまぜていた。さらに、「ベティちゃんの牛乳からアイスを作るねんなあ」という言葉などから、アイスクリームという幼児が好きな食材であるだけでなく、今ここにいる牛の牛乳で調理できることに幼児たちは喜びを感じているようであった。

卵を割る作業についても、アイスクリームづくりがあるということで「家でお母さんと練習したよ」「卵を割るのはできるようになったよ」と多くの幼児が話してくれ、家庭でも意欲的に牧場体験をとらえて事前学習をさせてくださっていたことが明らかになった。

アイスクリームについては、全員が「とてもおいしい」「最高」と笑顔で食べていた。「今まで食べたアイスクリームの中で一番おいしい」と、自分で作ったものを食べる喜び、新鮮な食材で作る喜び、友達と一緒に作った喜びをそれぞれが感じていた時間となった。

全ての体験が終わり、搾りたて牛乳の試飲と、完成したアイスクリームの試食を最後に行った。あまくて、少しあたたかくて、いつも飲む牛乳と違いすごくおいしいと幼児たちは満足そうであった。牛乳が苦手だと言っていた幼児については、1人は少し飲んだが「ごめんなさい」と言って全部飲めなかった。後は全員「いつもと違う」と驚きながら飲んだり、少し苦手だという顔をしたりしながらも全部飲むことができた。



Fig.6 みんなで協力して作るアイスクリーム



Fig.7 かきまぜる係とボウルを持つ係

### 3.「絵日記」の実際と幼児の姿

翌日の朝の最初の保育活動としては、画用紙に牧場体験の思い出をクレパスで思い思いに描く活動を行った (保育者も幼児も「絵日記」と呼んでいた)。この描画活動については、幼児たちが、牧場での思い出、牛との思い出をいきいきと描いたと保育者たちは評価した。特に、牛の優しさを感じさせるような目の表現や、実際に見たからこそ感動して分かったあしの爪の描写など、幼児の興味や関心が絵に表れていると園長も担任保育者たちも評価していた。



Fig.8 幼児が牧場体験や牛を描いた「絵日記」

#### 4. 2回目の「牛についての知っていること」の実際と幼児の姿

事前学習で用いた牛の写真と幼児たちが牛について知っていると発言したことを保育者がまとめて付箋紙で貼った画用紙 (Fig.9の色付箋紙をつける前の状態のもの) を改めて取り出し、牧場に行って分かったことを幼児たちに聞き、その言葉を保育者が付箋紙で足していった。幼児たちは、実際に牛に触って感じたことや、特に、牛が「優しくかった」ことについて意見を出していた。また、おじいさんから教わった言葉を答える幼児もいた。

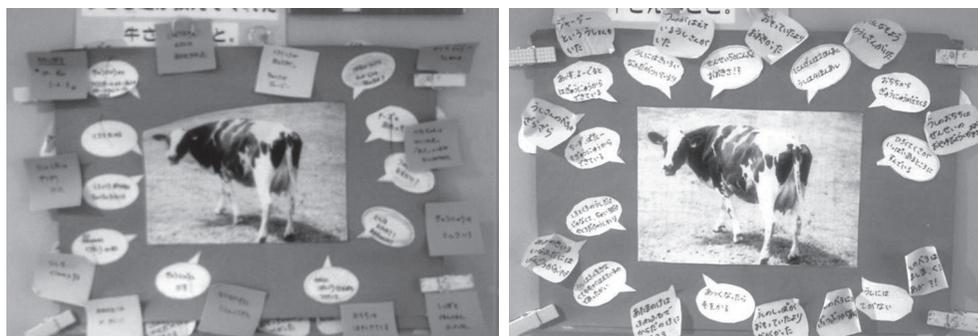


Fig.9 体験後の話し合いで分かったこと

全員が自分の意見も言い、友達の見もしっかり聞くことができた保育者のクラスでは「頭の毛はふわふわでからだの毛はつるつる」「つのがはえている牛さんがいた」「いろんな模様の牛さんがいた」「牛のお乳は先生の親指ぐらいの大きさ」「牛のしっぽが思っていたより長かった」「しっぽをぐるんぐるんと振っていた」「牛の舌はざらざら」「牛の舌は赤、黒、しましまだったような」「牛乳はミルク色」「お乳は少しずつ細く出てくる」「搾りたてはあたたかい」「牛もくしゃみをする」「大きな声が嫌い」という、さまざまな声が出てきた。この幼児の一つひとつの意見に保育者が「どうだったー？」と全員に聞き返し、話し合いを促すことで、幼児は友達の話を知ろうとし、自分の知っている牛についてよりいっそう考えることで興味をもったようであった。

自分の意見を言うことに夢中で、なかなか友達の見を聞くところまではいかなかったクラスについても、「ジャージーという牛がいた」「大きかったー」「つめが大きい」「ちょっと怖かった」「ハートのもようだった」と、一人の意見に対して「そうそう」「うん、怖かったー」「でも優しく

た」「おとなしかったよ」「ダイヤのもよの牛もいたよ」と、自分の興味や関心に合ったところについては口々に答えることができていた。

クラスによって発表の仕方に差は出たものの、出てきた意見は概ねどのクラスも共通するものであった。また、幼児たちが実際に体験したことを話そうとする意欲は全てのクラスから感じられた。保育者も「子どもたちはよく見ている」「優しい気持ちで牛を見ていたことが分かった」と評価した。

「クラスによって発表の仕方に差があり、保育者の力量で子どもの言葉を読み取るだけでなく、子どもたちどうして聞き合う大切さを意識することも大事だと感じた」という意見も保育者から出た。さらに、全プログラム終了後の保育者への個別インタビューでは「普段から子どもたちにも言っている『心で聴く』ということを実践するのは当然大事だが、それを年長の子どもたち全員ができるように保育を実践することも大事で、そのやり方をどんな風に3人のクラス担任で共有化すればよいのかを考えるのも今後の課題かもしれない」と語る保育者もいて、新たな課題を見出すに至った。

### (3) プログラムに関する保護者の評価

保護者アンケートの自由記述は、一人が複数のエピソードを書いているものもあるため138件であった。自由記述からは、幼児たちの意欲に感動した声や、牧場体験ができてよかったという声が多く見られた。特に「友達と一緒にだったから牛を怖がらず乳搾りもがんばれた」という意見や「友達と一緒に経験することが家庭で牧場などに行くことと違って何より楽しかった」という意見も見られ、幼稚園で牧場に行くことの意義を感じさせる結果となった。

幼児たちが牧場体験で一番楽しかったことは何かについて、牧場体験の次の日、保育者に問いかけてもらい答えてもらったところ、幼児たちは「アイスクリームづくりが一番楽しかった」と答えていた。しかし、保護者アンケートからは「子どもは乳搾りを一番楽しかったと答えていた」という回答が31名で、わずかながら27名のアイスクリームづくりという回答より多く、一番多く見られた回答であった。幼児たちにとって、初めての幼稚園の友達と共に行う調理体験でもあり、大好きなアイスクリームづくりだったため、その場は非常に盛り上がり、とても楽しかったに違いない。だが、静かにしていたため、一見盛り上がりを感じられなかった乳搾り体験も、幼児たちはじっくりとその感動を楽しんでいたようで、その感動を保護者に家庭で伝えていることが明らかになった。

保護者の自由記述から「牛はとっても優しくかった」「乳搾りをまたやりたい」「家のみんなにもさせてあげたい」と語っていたという回答は多く見られ、乳搾りを通して牛への愛情が育まれていたこと、それを伝えたい気持ちが育っていることが明らかになった。また「おじさんに（乳搾りが）上手だと褒められたことをずっと語っていた」という回答も見られ、牧場の人たちの幼児たちへの対応が、幼児たちの乳搾り体験をさらによいものにしたことが明らかになった。

実際、牧場のおじいさんから「初めてなのに全員が泣いたりせず乳搾りをできたことはすばらしい」と驚きも含めて幼児たちと保育者を褒めてくださった場面が園長や保育者にとっても印象的な場面であったと保育者との評価に関する話し合いの中で確認されている。

牛乳についても「あんなにあまくておいしい牛乳がまた飲みたい」「ジャージーの牛乳が飲みたい」「自分が搾った牛乳がおいしい」というエピソードが多く見られたことや、「買い物で牛乳を見ると語りだす」「おいしい牛乳が飲みたいと言うようになった」というエピソードが書かれていたことから、味覚を通して牛乳への思いをふくらませ、牛乳を飲むことへの意欲や買い物場面など動物や牧場とは異なる場面でも牛乳や牛を意識することができていることが明らかになった。

また、「たとえたくさん飲めなくても、牛を大事にする心から牛乳を嫌いと言わなくなってくれたらそれでいい」「牛から牛乳ができるところを見せてもらい、そうやって食事ができていることを感謝してくれればそれでいい」という声もあり、牛乳摂取にこだわり幼児に無理に飲ませることよりも、動物へのあたたかい気持ちや感謝の気持ちをもつことを大事にしてほしいと思っている保護者もいることが明らかになった。「くさかったけど我慢したよと話していた」という回答も複数あったことから、保護者の意識が牛乳摂取よりも幼児が他への思いやりの心を育むことに期待をもっていることが分かった。

牛の観察については、「牛さんは番号がついている」「なでなでしてたら、すごい勢いでうんちをしてたからびっくりした!」「牛さんのおっぱいがふわふわで」「牛の舌はざらざら」「牛の乳の数は多い」など、観察して分かったことや、「牛乳は白色ではなくミルク色」「乳搾りの仕方」といった、牧場のおじいさんから聞いたことを保護者に話すようすを回答した保護者も見られ、幼児たちなりに観察し、牛とふれあっていたことも明らかになった。

#### 4. 本研究のまとめと課題

ここまでの活動を5領域に対応した「ねらい」から振り返ると以下のようにまとめられる。

領域「健康」においては、牛について学び、牛や乳製品への興味や関心は高まったと考えられる。この後の活動が3月まで続くが、長期にわたり意欲的に活動に取り組んだ幼児の姿からも興味や関心は高まったと言えるであろう。

領域「人間関係」においては、牛について知っていることをお互いに意見を話したり聞いたりすることで、自分の意見を話す楽しさは知れたが、聞くことに対しては各クラスの保育者がまだ課題があると感じたようであり、次年度への課題として取り上げることになった。また、牧場の人たちの気持ちを考えて行動することで牧場でのあそびや学びを楽しむことはじゅうぶんにできたと考えられた。牧場の人たち、ひいては牛の気持ちになって行動することについては、保育者たちも「子どもたちはとてもよくがんばったと思う」と評価した。

領域「環境」においては、牛の大きさや酪農についての興味や関心は高まったと考えられた。保護者からのアンケート結果からも、身の回りの牛乳や乳製品により関心をもっていたことも明らかになっている。この後の活動で、牛や牧場への興味や関心の広がりや深まりが確かなものになる基礎をつくったと考えられる。

領域「言葉」においては、牛について自分の知っていることを言葉で伝え合うことは楽しめたと考えられる。話し合いについては領域「人間関係」で先述したとおりである。しかし、牧場の人たちなど、周りの大人の言葉を聞くことは楽しむことができた。

領域「表現」については、乳搾りを意識した手あそび、牧場や牛への興味や関心を身体による表現を楽しむことで興味や関心を深めたと考えられる。牧場での思い出を描画活動を通して自分らしく表現することを楽しめたと考えられる。

本研究で開発した、牧場体験を核にした食育プログラムを実施した結果、牧場体験で、牛や酪農家と実際にふれあう中で、幼児なりの食（及び食にまつわる動物）への感謝の気持ちをもったのではないかと思われる。たとえば、牛乳が飲めなくて「ごめんなさい」とつぶやいた幼児の気持ちは、その場にいた担任保育者も「優しい気持ちが育っていると感じた」と語っている。

また、この経験が、牧場にお手紙を書く活動での文字を書きたいという思いや、研究者も保育者も想定していなかった「牛を作りたい」と幼児たちからの言葉で始まった造形活動、幼稚園で初めて行う調理体験活動、牧場との遠隔交流における「ありがとうって言いたい」という幼児の言葉にあらわれる思いへとつながっていたと思われる（詳細は別稿で報告予定）。

以上の成果は、牧場体験を含む食育プログラムが幼児にとって心から楽しみ学ぶことができるものであったからだと思われる。また、楽しく活動できるように事前学習に幼児の恐怖感を払拭する活動と、ただ楽しいだけではなくおいなどを考えさせる活動を含んで準備したことが大きいと思われる。

また、大自然とふれあう機会の少ない都会の幼稚園では、たった1回の自然体験でも貴重な経験となるが、それが幼児にとって肯定的な感情のもとで経験できることが大切であると思われる。ただ自然に幼児を放つのではなく、自然から何を学んでほしいのかというねらいをもって活動を構成することが基本である。本プログラムも同様で、ただ牧場に行ったから幼児が牛をはじめとする食に興味をもったわけではないと考える。事前学習がなければ、大きな牛への恐怖感で触れることなく終わってしまう幼児や、牧場で「くさい」と嫌がる幼児もいたかもしれない。

以上のように、牛についての知識を学ぶような事前学習ではなく、もっと牛や牛乳について学びたいと幼児自らが思えるような保育者の援助を中心とした事前学習であったことが、牧場体験をより豊かな学びの場にしたと考えられ、評価されるのではないだろうか。

さらに、本プログラムの実践過程の中で、「改めて今までの幼稚園での保育を振り返る契機になった」と園長や担任保育者が事後インタビューで語っているが、保育者間の保育方法の共有を会議で話す時間をもつことや、普段の保育にも活かしたいという思いを保育者たちが感じたことも大きな成果だと思われる。特に「思いやりを育む」の具体的な内容の1つとして「お友達の話聞く」ということについて今後どう取り組むかが保育者と筆者の反省会で出され、改めて日常保育でも意識して取り組むことになったという話があった。本プログラムの評価に関する話し合いにおける「友達の話聞くことができたか」という項目は、「担任によって異なる」という結果であったが、本プログラム以降の保育では、「お友達の話聞く」ことを意識した保育実践が見られるようになったということであった。

課題と展望については、以下の2点が考えられる。

一つめは、「牛乳嫌いの克服」についての課題である。本研究のプログラムによる保育活動を通して乳製品に興味をもったり調理体験に興味をもつことはできたが、嫌いな幼児にとっては、

克服できない結果になることもあることが明らかになった。小林・古賀（2009）も、幼児は知識を得たり感動したりすることで食に関心をもつため、心情面に訴える保育内容によって偏食の改善傾向は見られるが、偏食改善が見られない幼児も存在し、個別対応が必要である<sup>6)</sup>と結論づけられている。本研究でも、どうしても飲めなかった幼児が1人見られた。牧場体験を中心に感動し、知識も得たが、先行研究同様の結論を得た。本研究の保育者と筆者の評価検討会では、その飲まなかった幼児が「ごめんなさい」と言って残したことだけでも大きな成果ではないかと考えている。しかし、今後は「嫌いでも食べる、飲むことができ、好きになる」保育プログラムにも挑戦し、改善する課題もあるかもしれない。

二つ目は、本プログラムの実施から生まれた新たな課題について取り組むことが求められることである。研究者が開発したプログラムを実践者に押し付けたり、逆に、実践を研究者が外から観察するだけではなく、プログラムの開発段階から、研究者と保育者が幼稚園の目標や普段の保育を具体的に捉えなおし、幼稚園の教育目標やねらいを改めて意識してプログラムを開発することができたため、プログラムにおける課題だけではなく、幼稚園のもつ潜在的な保育に関する課題も明らかにできたと考えられる。言い換えると、幼稚園の保育に沿った牧場体験を核にしたプログラムの開発と形成的な評価を研究者と保育者が共に行うことで、保育者も研究者も共に成長することを可能にしているのではないだろうか。本プログラムの改善を目指すことが、本プログラムだけではなく、幼稚園での普段のさまざまな保育活動の充実を図ることにつながることを踏まえて、保育者と研究者がよりいっそう連携して取り組むことの重要性が示唆された。

本研究は、一般社団法人Jミルク 平成25年度「食と教育」学術研究「幼稚園における牧場体験を取り入れた食育プログラムの開発と評価」（代表：松山由美子）による研究の一部である。

#### <引用・参考文献>

- 1) 古郡曜子・山口宗兼（2012）「幼稚園における食育カリキュラム作成に関する基礎的研究－幼稚園教諭へのインタビュー調査を通して－」『北海道文教大学研究紀要』第36号 23-34.
- 2) [おおさか食育通信－健康栄養情報] 大阪府食育推進プログラム「平成20年度 幼稚園・保育所における食育実施状況アンケート」結果（2014.03.31）  
[http://www.osaka-shokuiku.jp/kenkoeiyo/kenkoueiyou\\_media/20nen\\_condition02.pdf](http://www.osaka-shokuiku.jp/kenkoeiyo/kenkoueiyou_media/20nen_condition02.pdf)
- 3) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課長通知（2004）『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～』（平成16年3月29日雇児保発第0329001号）
- 4) 田中博之（2011）「牧場での体験学習活動が、児童の意識や行動に及ぼす教育的効果の検証」社団法人中央酪農会議酪農教育ファーム推進委員会.
- 5) [おおさか食育通信－健康栄養情報] 大阪府食育推進プログラム「平成20年度 大阪府における幼児の食生活状況アンケート」結果（2014.03.31）  
[http://www.osaka-shokuiku.jp/kenkoeiyo/kenkoueiyou\\_media/20nen\\_condition01.pdf](http://www.osaka-shokuiku.jp/kenkoeiyo/kenkoueiyou_media/20nen_condition01.pdf)
- 6) 小林小夜子・古賀克彦（2009）「幼児の偏食改善に向けた保育実践研究－加工を施さないトマトの場合－」『幼年教育研究年報』第31巻 23-28.

